C-2

「太郎の」のような日本語の省略的 NP 再考 *

川口颯午 (東京大学教養学部)

概要

「花子の車は太郎のよりもかっこいい」のような文における「太郎の」のような省略的 NP には、いくつかの分析が提案されてきた。本発表では、「太郎の」の後ろに空名詞句 *e* があるという空名詞句分析や、「太郎の」の後ろの名詞句が削除されているという削除分析を退け、代名詞の「の」を主辞とする「太郎のの」ような句から、重音脱落によって一つ目の「の」が落ちて省略的 NP「太郎の」が表層的に現れるという古典的な分析を擁護する。意味的な制約、レジスター、照応の性質、諸方言のデータ、韻律など、多様な領域からの証拠が提示される。

1 研究背景

日本語共通語では、「の」で終わり名詞にかかる句が、単独で名詞句として振る舞っているように見えることがある。これらの句は、後ろに何らかの要素が省略されているかのように解釈され、例えば、(1) の [$_{NP}$ ミホの] は「ミホの家」を意味する。

(1) タクミの家は、[$_{NP}$ ミホの] よりもちょっと古い。<12,3,0,0> *1

(2) ベストアンサーには、[$_{NP}$ 最も遠そうな国からの] を選ばせてもらいます。(BCCWJ: OC13_00315 530)

(3) 夏用スーツは [$_{NP}$ 裏地がキュプラの] を選ぶようにしています。(BCCWJ: OC09_08977 3620)

(4) 仕事に慣れたころ、待ちに待ったカメラを買った。(BCCWJ: LBd2_00033 28300)
…アタマにきて、またカネをため、[$_{NP}$ いっそう新式の] を購入した。(BCCWJ: LBd2_00033 30220)

(5) [$_{NP}$ 例の] を掏られた。(BCCWJ: LBf9_00195 28040)

(6) [$_{NP}$ もともとの] と見比べて、ぜひ楽しんでください。(BCCWJ: LBf9_00195 28040)

まず、以下の 1.1 節から 1.3 節でこの現象の 3 つの大まかな分析、重音脱落分析、空名詞句分析、削除分析を概観する。続く 2 節〜4 節で重音脱落分析を支持する証拠を見た上で、5 節にて、重音脱落分析の中の二つの分析、~~ノ~~ノ分析およびノ~~ノ~~分析のうち、前者の方を支持する証拠を見る。6 節にて主辞駆動句構造文法に基づいた簡易な形式化を提案する。

1.1 重音脱落分析 (~~ノ~~ノ分析およびノ~~ノ~~分析)(奥津 1974; 神尾 1983; Hiraiwa, 2016)

共通語には、直前に名詞にかかる表現を伴って、一項述語の名詞 (句) に相当する表現の意味 ((7b) では「桃」) を代わりに担う代名詞*2 の「の」(「の$_{Ana}$」とする) が存在するが、直前の表現が「の」で終わる場合は容認不可能となる。

* 本発表は、発表者が東京大学教養学部にて執筆中の卒業論文の内容の一部である。ご指導頂いた主査の矢田部修一先生、また有益なコメントを頂いた副査の森芳樹先生および藤川直也先生に謝意を表する。

1 一部の例文についている 4 つの数字の並びは、左から順にそれぞれ、発表者が実施したアンケートにおいて、その文を「完全に自然である」「少し不自然である」「かなり不自然である」「全く日本語になっていない」と判断した人の数である。東京大学駒場キャンパスに張り出した掲示、及びその掲示の内容の SNS での拡散を通じて集められた 15 人の日本語母語話者 (平均年齢 20.2 歳) に Google フォーム上でアンケートに回答してもらい、所要時間相当額の謝金を支払った。4 つの数字を<a,b,c,d>としたとき、(a+2b+3c+4d)/(a+b+c+d) が 3.5 以上であれば例文の先頭にに「」を、3 以上で 3.5 より小さければ「?*」を、2.5 以上で 3 より小さければ「??」を、2 以上で 2.5 より小さければ「?」を付けて、2 より小さければ何も記号を付けない。

*2 「代名詞」の呼称は金水 (1995) による。実態としては英語の *one* のような ISA(Identity of Sense Anaphora) に近い。

(7) a. この桃はいらない。{いつも買ってる/もっと赤い/もっと新鮮な/岡山の/普通の}桃が欲しい。

b. この桃はいらない。{いつも買ってる/もっと赤い/もっと新鮮な/岡山 (*の)/普通 (*の)}のが欲しい。

したがって、直前から「の」で終わる表現がかかった、「の$_{Ana}$」を主辞とする句 (「岡山の の$_{Ana}$」「普通の の$_{Ana}$」) から、音声上好まれず一方の「の」が脱落する (重音脱落、Neeleman & van de Koot, 2017 参照) ことにより、省略的 NP が表層上現れると考える。この分析は、「岡山~~の~~ の$_{Ana}$」のように一つ目の「の」が脱落していると見るか (~~ノ~~ノ分析)、「岡山の ~~の~~$_{Ana}$」のように二つ目の「の$_{Ana}$」が脱落していると見るか (ノ~~ノ~~分析) で二通りに分かれる。

1.2 空名詞句分析 (Kitagawa & Ross, 1982)

一方、空名詞分析では、二種類の「の」を想定する必要はないとし、(8)(9) のルールを提唱する。

(8) $[_{NP}$ X NP $] \rightarrow [_{NP}$ X no NP $]$ where X stands for any category functioning as a modifier

(9) $[_{NP}$ X no NP $] \rightarrow [_{NP}$ X NP $]$ where NP $\neq e$ and X = [... tense]

(7) はこのルールによって説明され (「もっと赤い~~の~~桃」「岡山の桃」「もっと赤いの e」「岡山の e」)、省略的 NP は後ろに空名詞句 e を伴っているとされる。また、「の」を前置修飾要素 X と NP(空でも可) を繋ぐ要素の一種類に限定することで、「*(大きい) のをください」のようなデータを説明できるとする[*3]。

1.3 削除分析 (Saito & Murasugi, 1990; Saito et al., 2008)

「の$_{Ana}$」は抽象名詞の代わりには用いられない (*固いの (=信念) を持った人、??鋭いの (=批判精神) の持ち主) という神尾 (1983) の一般化に基づき、「依存」「態度」などの抽象名詞を先行詞に含む省略的 NP は重音脱落分析では捉えられないとした上で、(10) のように、意味役割を持つ NP 内の項が DP 指定部へ移動し、先行詞と形式上同一の NP が削除されて省略的 NP が表層上現れると分析する。(11) が容認されないのは、$[_{NP} t_i$ 山田先生への依存] が、痕跡 t を含むような形式上同一の先行詞を欠いているからであり、(12) が容認されないのは、意味役割を持たず NP 内の項ではなく付加詞である「晴れの」には DP 指定部への移動が許されない[*4] からである、というようにデータが説明される。

(10) $[_{DP}$ 学部生の$_i$ $[_{NP} t_i$ 先生への依存]] は許せるが、$[_{DP}$ 院生の$_j$ $[_{NP}$~~t_j 先生への依存~~]] は許せない。

(11) *$[_{DP}$ そのときの $[_{NP}$ 山田先生への依存]] は $[_{DP}$ 太郎の$_i$ $[_{NP}$~~t_i 山田先生への依存~~]] だった。

(12) *最近は $[_{DP}$ 晴れの$_i$ $[_{NP} t_i$ 日]] が $[_{DP}$ 雨の$_j$ $[_{NP}$~~t_j 日~~]] よりも多い。

2 意味的な制約およびレジスターの制約からの証拠

重音脱落分析では、省略的 NP を「の$_{Ana}$」を主辞とする句であると考えるため、省略的 NP にも「の$_{Ana}$」が持つ制約が課されることが予測される。本節では、指し示せる意味範疇の制約およびレジスターの制約について、この予測通りのデータが観察されることを見る。

「の$_{Ana}$」は基本的に具体的な「もの」を指すのに用いられるため、「場所」や「時」を表す解釈が困難であり、また、人を指すのに用いられると「もの」扱いしたような侮蔑的な意味が生じ、そして、この性質は省略的 NP にも見られると言われてきた (McGloin, 1985; Hiraiwa, 2016 [*5])。このことは以下のデータから確かめられる。

[*3] 一方、重音脱落分析では、なぜ「の$_{Ana}$」が前置要素なしで使われ得ないのかが不明となる、との批判がなされている。本発表でこの疑問への明瞭な答えを提示することはできないが、この種の名詞は「の$_{Ana}$」に限られず、「やつ」「とき」「とこ (ろ)」「よう」「ほう」「者」(Hiraiwa (2016) が「軽名詞」と呼ぶもの、) や、「さい」「場合」「たび」「ため」「せい」「とおり」(益岡・田窪 (1992) において「形式名詞」とされているもの)、また「子」「ち」(「*(俺ん) ち」) など、「の$_{Ana}$」と同じように意味的または韻律的に「軽い」多くの名詞がこの特徴を持ち、Kitagawa & Ross の説明は「の」以外の例には当てはまりそうがないことを鑑みると、何らかの別の方法で (「の$_{Ana}$」を含む) これらの例を統一的に説明した方が良いように思われる。

[*4] Saito らは専ら属格助詞が関わる例について論じているため、(3) から (6) のような例に触れていないが、これらを NP 削除として分析するには、意味役割を持たない付加詞の DP 指定部への移動が欠かせないように思われる。

[*5] Hiraiwa (2016) は、Saito らの (12) の容認不可能性の原因を「の$_{Ana}$」が「時」を指せないという制約に帰している。

(13) a. ?タクミの家は狭いから、もっと広いので遊ぼうよ。<1,7,7,0> [*6]

b. ?タクミの家で遊ぶよりは、ケンタので遊ぶ方が楽しいと思うよ。<0,10,5,0>

(14) a. [物理学を専攻している大学生の、指導教員と話しているときの発言]

?? A 大学と言えば、理論物理学をやっている先生がいらっしゃる上に、実験物理学をやっているのもいらっしゃいますよね。<1,2,11,1>

b. [中学生のアカネとカオリの担任の先生の、授業参観後に二人の親と話しているときの発言]

??アカネさんの親御さんがいらっしゃるとは聞いていましたが、カオリさんのもいらっしゃるとは！<0,4,11,0>

なお、1.3 節で触れた、「の$_{Ana}$」は抽象名詞の代わりには用いられないという神尾 (1983) の一般化は、金水 (1995) や Hiraiwa(2016) によって反例が挙げられているが、以下のデータはその一般化の真偽の程度に関わらず、それに基づいた Saito らの議論への反論となる。もし Saito らの主張が正しければ、省略的 NP が抽象名詞を先行詞とする文 (15a) は容認可能な一方、「の$_{Ana}$」が抽象名詞を先行詞とする文 (15b) は容認不可能となるはずだが、実際には両文の間にそのような有意な容認度の差は観察されない ($p = 0.7734$) [*7]。この事実も重音脱落分析の予測する通りである。

(15) a. タクミの態度はケンタのほど誠実ではなかった。<8,6,0,1>

b. タクミが見せた態度はケンタが見せたのほど誠実ではなかった。<8,6,1,0>

次に、レジスターに関する制約を見る。(16b) が (16a) より有意に容認度が低い ($p < 0.01$) ことより、「の$_{Ana}$」は砕けた表現であり、改まった表現が求められる場面には適さないことがわかる。重音脱落分析が予測する通り、同じことが省略的 NP にも当てはまることが、(16d) が (16c) より有意に容認度が低い ($p < 0.01$) ことからわかる。

(16) [ある通販サイトから、その利用者へ送られたお詫びのメールの中の文章]

大変申し訳ございません。

a. お客様が購入された商品とは異なるものが発送されてしまったようです。<15,0,0,0>

b. ?お客様が購入された商品とは異なるのが発送されてしまったようです。<1,8,6,0>

c. お客様が購入された商品とは別のものが発送されてしまったようです。<15,0,0,0>

d. ?お客様が購入された商品とは別のが発送されてしまったようです。<2,7,6,0>

省略的 NP と「の$_{Ana}$」を無関係であるとする削除分析では、これらの共通性を捉え損なってしまう。一方、空名詞句分析では、e が基本的に「もの」を指す砕けた表現であるとすれば、これらの共通性を捉えることは可能である。

3 可能な先行詞からの証拠

1 節冒頭で確認したように、省略的 NP は一種の照応表現である。ここで、任意の省略的 NP について、その後ろにあると仮定することで、その省略的 NP の適切な解釈を得られるような言語表現を、その省略的 NP の先行詞とする。削除分析によると、省略的 NP は形式上同一の言語的先行詞を要求することになるが、そのような先行詞が存在しない事例が多く存在する。

まず、(17)(18) は非言語的文脈のみに基づいて先行詞の同定が行われる例である。

(17) [京都旅行帰りの同僚 A が、同僚 B に八橋を、同僚 C にわらび餅を渡しているのを見て]

私のはないの？

[*6] (13)(15) については、「もっと広いの」「ケンタの」「ケンタの」「ケンタが見せたの」がそれぞれ「もっと広い家」「ケンタの家」「ケンタの態度」「ケンタが見せた態度」を指すような解釈の上で自然であるかどうかを被験者に尋ねた。

[*7] 本発表を通じて、p 値はウィルコクソンの符号順位検定 (片側) の結果を示す。

(18) [A と B が夢のような状況に遭遇し、A の頬をつねってきた B に対して、A が言う]
痛い痛い痛い！ 自分のでやってよ。

(19)(20) でも、形式上同一の表現が存在しなくても、文脈に加えて、それぞれ同位語「タキシード」「彼女」の存在により、先行詞「ドレス」「彼氏」は同定される。(21) についても、(「自分の恋人への依存」を共通の上位概念として持つ) 同位概念「自分の彼女への依存」の存在と文脈により、先行詞「自分の彼氏への依存」が同定される。

(19) [ケンタとミホは (それぞれタキシードとドレスを着て) *8 屋外パーティーに参加していたが、突然の雨に見舞われてしまった。その後の二人の会話]
ミホ：あなたのタキシード、びしょびしょじゃない！
タクミ：君のもびしょびしょだよ！「君のドレス」<10,2,1,0>、「君の服」<0,2,0,0> *9

(20) [兄妹であり、共に異性愛者であるテツヤ (男性) とミユキ (女性) のそれぞれの恋愛事情についての、二人の父親の発言]
テツヤの彼女はとても丁寧な人だったけど、ミユキのは何とも無礼なやつだったよ。
「ミユキの彼氏」<6,7,1,0>、「ミユキの恋人」<0,1,0,0>

(21) [兄妹であり、共に異性愛者であるテツヤ (男性) とミユキ (女性) のそれぞれの恋愛事情についての、二人の母親の発言]
テツヤの自分の彼女への依存は、ミユキのよりもずっと深刻だと思うわ。
「ミユキの自分の彼氏への依存」<6,6,2,0>、「ミユキの自分の恋人への依存」<0,1,0,0>

(22) から (26) には特に文脈情報はない。(22) から (24) では、先行詞に相当する表現「音楽」「ゲーム」「部屋」の意味がそれぞれ拘束形態素 (「楽」)、略語の第二要素 (「ゲー」)、複合語の第二要素の外来語 (「ルーム」) であるため、これらの表現を形式上同一の先行詞とすることはできない (「*アメリカやイギリスの楽」「*普通のゲー」「??もっと格安のルーム」)。(25) および (26) については、「犬の」が「ドッグフード」を意味し、「鳥の」が「鳥にとっての、犬にとってのドッグフードや猫にとってのキャットフードに相当するもの」を意味するように直観的に思われることから、形式上同一の言語的先行詞が存在しないだけでなく、省略的 NP の後ろに何らかの言語的表現が省略されていると考えることも困難であるように思われる。

(22) タクミは邦楽しか聴かないのに対して、ミホはアメリカやイギリスのしか聞かないから、あの二人は趣味が合わないんだよ。
「アメリカやイギリスの音楽」<11,1,0,0>、「洋楽」<2,0,0,0>、「アメリカやイギリスの曲」<1,0,0,0>

(23) あいつはクソゲーしかやらないから、たまには普通のをやらせてあげたい。「普通のゲーム」<14,1,0,0> *10

(24) この前旅行でタクミとホテルに泊まったとき、彼はスイートルームを予約していた。私はもっと格安のでよかったのに。「もっと格安の部屋」<10,1,0,0>、「もっと格安のルーム」<1,0,0,0> *11

(25) あのお店はキャットフードは売ってるのに、何故か犬のは売ってないんだよね。「ドッグフード」<9,2,0,0>、「犬の餌」<0,1,0,0>、「犬用のペットフード」<1,0,0,0>、「犬のペットフード」<1,0,0,0>、「犬のフード」<1,0,0,0>、

*8 言語表現を提示することを避けるために、この情報は、アンケートの回答者にはイラストで提示された。

*9 (19) から (26) については、与えられた文の自然さを評価してもらった上で、省略的 NP をどのように解釈したかを記述式で回答してもらった。「X」<a,b,c,d>、「Y」<e,f,g,h>…とあるとき、<a,b,c,d>はその文の省略的 NP を「X」と解釈した人たちの間での容認度の分布を、<e,f,g,h>は「Y」と解釈した人の間での容認度の分布を表す。多様な記述式の回答が見られたものの、スペースの都合上、例えば (19) における「ミホのドレス」「君のドレス」、また後ろの「省略」された要素のみを答えた「ドレス」、その他表記上の揺れに基づくと思われる回答はまとめて示してある。

*10 同定された先行詞が同じく「ゲーム」であり、意味的にも近かったためにまとめたが、実際はこのうち三回答は何故か「普通の」を「面白い」などの別の言葉に置き換えていた。

*11 「もっと格安の部屋」には、修飾要素が「安い」などに言い換えられたものも三つ含まれている。また、残りの残りの三回答は先行詞を「ホテル」と同定していた。

(26)　あのお店はキャットフードは売ってるけど、鳥のは売ってないと思うよ。
「鳥の餌」<8,5,0,0>、「鳥用の餌」<0,1,0,0>、「鳥の食べ物」<0,1,0,0>

こういった省略的 NP の深層照応的な性格 (Hankamer & Sag, 1976) は、重音脱落分析では予測されるものである。この分析では、省略的 NP の後ろに何かが省略されているからではなく、省略的 NP の主辞である「の$_{Ana}$」がそもそも照応表現であるために、省略的 NP が一種の照応表現として機能すると考える。したがって、省略的 NP の深層照応的な振る舞いは、(27)(28)(29) からわかるような「の$_{Ana}$」の深層照応としての性質から予測することができる[*12]。

(27)　[その場にいる人で食べるために、ケーキを複数人分に切り分けてる人に向かって]
私、小さいのでいいですよ。

(28)　クソゲーばっかやってないで、たまにはまともなのもやればいいのに。

(29)　なんでスイートルームとったの？ もっと安いのでよかったのに。

一方、本節の事例は、省略的 NP に形式上同一の言語的先行詞を要求する削除分析への強い反論となる。だが、空名詞句分析については、*e* を深層照応とすれば、本節の事例を問題なく扱うことができる。

4　変異・変化からの証拠

共通語における、属格助詞などの、名詞にかかる表現の一部の末尾にくる「の」(以下、「の$_{RT}$」とする) に相当する語と、「の$_{Ana}$」に相当する語は、どちらも方言間で著しい変異を見せる (大野 1983) ため、共通語と異なり、この二語が異なる音形をとる方言も存在する。重音脱落分析では、このような方言では重音脱落が起きないために、共通語の省略的 NP に相当する表現において、「の$_{RT}$」に相当する語と「の$_{Ana}$」に相当する語の両方が表層上現れることが予測される。この予測が正しいことは、(30) の日向方言のデータおよび (31) の高知方言のデータから確かめられる。

(30)　ミホ ん$_{RT}$ 車はかっこいいけど、[$_{NP}$ タクミ*(ん$_{RT}$)*(と$_{Ana}$/つ$_{Ana}$)] はだせえわ。

(31)　あいつ の$_{RT}$ 車はダサいけんど、[$_{NP}$ 俺*(の$_{RT}$)*(が$_{Ana}$)] はだせえわ。

共通語の「の」を統一的に扱う空名詞句分析は、これらの方言のデータには簡単には当てはまらない。また、重要なことに、日向方言の「*タクミ ん$_{RT}$」や高知方言の「*俺 の$_{RT}$」がなぜ容認不可能なのかを説明しなければならないという困難が削除分析には生じる。

5　韻律からの証拠

重音脱落分析の支持者である奥津 (1974)、神尾 (1983)、Hiraiwa (2016) は、省略的 NP において、一つ目の「の$_{RT}$」と二つ目の「の$_{Ana}$」のどちらが脱落しているのかについて決定的な議論を行なっていない。しかし、Poser(1984) は、脱落しているのが一つ目の「の$_{RT}$」であることを示す議論を行なっている。

「の$_{RT}$」の一種である属格助詞の「の」(以下、「の$_{Gen}$」とする) は、最後の軽音節にアクセントを持つ複音節語の後ろについたときに、その単語のアクセントを消すことがある。例えば、(32) において、「ウマ'」はそのアクセントを失っている。

(32)　ウマ の$_{Gen}$ わ' ら

一方で、の$_{Ana}$ にそのような性質は見られない。

(33)　だ' いすきなのは くろ' い の$_{Ana}$ だ。

[*12] 「の$_{Ana}$」に意味的に近い英語の *one* も深層照応である。(Hankamer & Sag, 1976)

ここで、「馬の」のような省略的 NP が重音脱落によって「馬 の$_{Gen}$の$_{Ana}$」→「馬の」と分析されるとき、「の$_{Gen}$」と「の$_{Ana}$」のどちらが消えているのか、およびアクセントの消去と重音脱落のどちらが先に起こるのかによって、(34) のように 4 つのシナリオが考えられるが、アクセント消去が起こる前に重音脱落で の$_{Gen}$ が消えてしまっているために、(34d) の場合のみ「ウマ'」のアクセントが保持されることになる。

(34) a. ウマ'の$_{Gen}$の$_{Ana}$ →ウマ の$_{Gen}$の$_{Ana}$ (アクセント消去) →ウマ の$_{Gen}$ (重音脱落)

b. ウマ'の$_{Gen}$の$_{Ana}$ →ウマ の$_{Gen}$の$_{Ana}$ (アクセント消去) →ウマ の$_{Ana}$ (重音脱落)

c. ウマ'の$_{Gen}$の$_{Ana}$ →ウマ'の$_{Gen}$ (重音脱落) →ウマ の$_{Gen}$ (アクセント消去)

d. ウマ'の$_{Gen}$の$_{Ana}$ →ウマ'の$_{Ana}$ (重音脱落)

以下の (35) からわかる通り、省略的 NP「馬の」において「ウマ'」のアクセントは保持されている。したがって、脱落するのは の$_{Gen}$ のような一つ目の の$_{RT}$ であるとわかる。

(35) ウマ' のは これです。

なお、削除分析や空名詞句分析で (35) を説明することは困難であるように思われる。

6 結語と理論的定式化

以上、共通語の省略的 NP に関する分析として、~~ノ~~ノ分析が最も妥当であることの証拠を見てきた。

(36) は、この重音脱落ルールの HPSG を用いた定式化である。

(36)
$$\begin{bmatrix} \textit{nono-hap-cx} & \\ \text{MTR} & \begin{bmatrix}\text{PHON} & \langle \boxed{1}, \boxed{2} \rangle\end{bmatrix} \\ \text{H-DTR} & \boxed{3} \\ \text{DTRS} & \left\langle \begin{bmatrix}\text{PHON} & \langle \boxed{1}, \text{no} \rangle\end{bmatrix}, \boxed{3}\begin{bmatrix}\text{PHON} & \langle \boxed{2}\text{no} \rangle \\ \text{SYN} & \begin{bmatrix}\text{HEAD} & \begin{bmatrix}\text{FORM} & \text{pronoun}\end{bmatrix}\end{bmatrix}\end{bmatrix} \right\rangle \end{bmatrix}$$

参照文献

「現代日本書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)

Hankamer, J., & Sag, I. (1976). Deep and surface anaphora. *Linguistic Inquiry*, *7*(3), 391-428.

Hiraiwa, K. (2016). NP-ellipsis: A comparative syntax of Japanese and Okinawan. *Natural Language & Linguistic Theory*, *34*, 1345-1387.

神尾昭雄 (1983)「名詞句の構造」井上和子 (編)『日本語の基本構造』77-126. 三省堂.

金水敏 (1995)「日本語のいわゆる N' 削除について」阿部泰明・坂本正・曽我松雄 (編)『第 3 回南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム報告書』153-176. 南山大学.

Kitagawa, C., & Ross, C. (1982). Prenominal modification in Chinese and Japanese. *Linguistic Analysis*, *9*(1), 19-53.

McGloin, N. H. (1985). NO-pronominalization in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics*, *10*, 1-15.

Murasugi, K. (1991). *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition* [Doctoral dissertation, University of Connecticut].

Neeleman, A., & van de Koot, H. (2017). Syntactic haplology. *The Wiley Blackwell Companion to Syntax, Second Edition*, 4377-4407.

大野早百合 (1983)「現代方言における連体格助詞と準体助詞」『日本学報』2, 27-66.

奥津敬一郎 (1974)『生成日本文法論』大修館書店.

Poser, W. J. (1984). *The phonetics and phonology of tone and intonation in Japanese* [Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology].

Saito, M., Lin, T. H. J., & Murasugi, K. (2008). N'-ellipsis and the structure of noun phrases in Chinese and Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, *17*, 247-271.

Saito, M., & Murasugi, K. (1990). N'-deletion in Japanese. *UConn Working Papers in Linguistics*, *3*, 87-107.

益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法–改訂版–』くろしお出版.